

(実践報告)

金沢学の計画と実践

松下美知子・岡沢 孝雄・苗田 敏美

I. 金沢学の計画

(1) 金沢学の構想

金沢大学留学生センターでは、平成14年度に開始された「文部科学省地域貢献特別支援事業」として『金沢学』への招待』を企画・実施して以来、3年間継続して、年度毎に形式と内容の改善を重ねながら「金沢学」を行ってきた。本学は、「総合大学であることの特徴を生かし、蓄積された研究成果と教育実績を踏まえた知識・技術等を地域に還元し、もって地域の知の向上と地域への貢献」を目指している。このコンセプトのもとに、平成7年度のセンター設立以降取り組んできた「留学生教育」・「日本文化理解カリキュラムの開発」・「地域との連携」など、これまでの活動実績とそれぞれの成果とを統合した地域貢献プログラムを企画し実施した。

「金沢学」とは、「地域に点在する有形・無形の文化的遺産・資源を集積し、その文化的価値を明らかにすると共に、それらを用いた学習活動を行い、さらには、文化の変遷を見ることにより、歴史・世代の流れを認識し、文化の継承と今後の発展とを図るもの」と定義できる。

「金沢学」を計画するにあたり、開始時点における具体的な目的を下記の3点に定めた。

1. 本学の留学生教育の特徴としての金沢学

大学が位置する地域には、大都会では見られない豊かな自然と古くからの歴史と伝統に育まれた文化があり、従来から、留学生を対象とした学習科目の作成には、意識的にそれらを取り入れてきた経緯がある。特に日本体験型の留学形態をとる日本語・日本文化研究生(日研生)や金沢大学短期留学プログラム留学生(KUSEP)対象のプログラムには、そうした地域的な特徴を取り入れて作成してきた。文化体験学習である「金沢学カリキュラム」は、既に日研生やKUSEPに対して実施した授業(日本文化関連科目)の中から、留学生の興味・関心・学習意欲を喚起し、なおかつ当地域で

のみ可能であるいくつかの科目を精選し、文化体験学習として深化・発展させたものである。さらに年度毎に、暫時カリキュラムの洗練を目指すものである。

このように、地域性を最大限に活用した文化体験学習のカリキュラム開発は、本学留学生センターの独自性（アイデンティティ）であり、特徴でもある。学習者を媒介として、金沢大学からの文化的発信を、広く国内外に行うことに貢献する事業と考える。

2. 文化体験学習を通じた国際教育交流

「金沢学」では、宿泊研修を含み、文化体験学習の機会を通じて留学生と日本人学生の交流を行い、留学生・日本人学生それぞれの多文化理解を目指すものである。留学生同士の交流は活発である反面、日本人学生と留学生間の交流は少ない。センター設立以降、日本人学生・留学生の間で親しく、また活発な交流が見られたのは、一緒になって活動した場面であり、その際に両者にとって得たものは大きく、そうした活動の機会を提供するねらいがある。

3. 地域との連携と文化活動を通じた地域への貢献

大学が位置する地域の自治体には、市民・県民向けの多くの日本文化関連の学習プログラムが存在している。そうしたプログラムの集積をはじめ、自治体の持つ学習施設の利用、さらには自治体による地域住民への講座との連携、学生たちとの共学により、地域の文化についての理解と多文化への理解を促すことに貢献する。

(2) 金沢学プログラムについて

① 自治体との連携

「金沢学」の開始に先立ち、自治体側と開講科目・講師・学習場所について協議する機会を持った。特に平成14年度の第1回目となる金沢学カリキュラムは、自治体側と大学側との共同作業で開発した。

市・県との会合はそれぞれ、

2002年10月8日 金沢市との最初の連絡会（於；市役所）

出席 金沢市都市政策部国際文化局文科政策課
金沢市都市政策部企画調整課

2002年11月1日 石川県との最初の連絡会（於；県庁）

出席 石川県企画開発部企画課

であり、これ以降、数回に亘る打ち合わせの結果、各年度の金沢学プログラムが完成した。なお、「金沢学」のスタートから3年が経過した現在まで、企画立案時の助

言・講師紹介・広報活動における公式・非公式の連携がある。

② 金沢学プログラムの構成

以前より留学生センターの講義科目であった「日本探訪」・「日本文化体験」で、留学生の学習ニーズが高かった内容と、自治体がこれまで企画してきた住民向け各種学習講座の中から、それぞれ精選した内容・講座を「金沢学」プログラムとして採用した。

カリキュラムは「講義」部分と「体験学習」部分の二つに大別される点に特徴が見られる。平成14年度実施の金沢学を例にとると、参加者全員が受講する講義として、「城下町としての金沢」、「金沢ことば」、「茶道を通して日本が見える」、「能楽」および「金沢の芸能」で、主として本学の教員が担当する。文化体験学習は、参加者の希望により各コースに分かれて行うものである。この年度は、参加者の希望により、「道^{どう}コース」「芸コース」「町並み体験コース」の3コースに分かれ、それぞれの文化の体験学習を、学外の専門家およびボランティアのもとで学習した。

具体的な講義名、講義内容を記したプログラムは、表1・表2に示す通りである。

表1 平成14年度金沢学プログラム

	日	月	火	水	木	金	土
午前		座禅	「金沢学」 講義	「金沢学」 講義	「金沢学」 講義	「金沢学」 講義	閉講式
午後	集合 開講式	文化概論	各コースに分かれて体験学習 (表2参照)			能楽鑑賞	自由解散
夜	オリエン テーション	エンカウ ンター	レクリエー ション	ミーティ ング	研修会	意見交換会	

表2 コース別体験学習 (平成14年度)

			火	水	木
1	道 ^{どう} コース		茶室文化 (茶道) 旧中村邸 金沢大学茶道部協力	茶室文化 (茶道) 耕雲庵	伝統工芸 (金箔) 箔巧館
2	芸 コース		伝統工芸 (友禅) 加賀友禅伝統産業会館	伝統工芸 (金箔) 箔巧館	伝統芸能 (能楽) (県立能楽堂)
3	町並み体験 コース	A 班	散策 (東山茶屋街)	伝統工芸 (金箔) 箔巧館	散策 (武家屋敷)
		B 班	散策 (東山茶屋街)	伝統工芸 (金箔) 箔巧館	散策 (武家屋敷)

(平成15年度・16年度は、体験別コースを設定せずに、参加者全員が同じ講義と体験学習を行ったが、その概要は後に詳述する)

平成14年度は、日本社会の現代的な面を多く持つ大都市圏に学ぶ全国の留学生・日本人学生を対象として、金沢という地域の豊かな自然、古くからの歴史と伝統に育まれた文化についての体験学習を行う「金沢学」講座を開設し、地域と日本文化についての理解を深めた。県や市との連携により、文化体験プログラムの開発や文化体験学習を通じた日本と日本文化への理解は、その後の地域に対する関心の喚起や日本文化学習への動機づけの機会と期待できるものであった。

③ 実施日時

各年度における「金沢学」の実施日時は、大学の正規の授業や諸行事を考慮した日程に設定した。

平成14年度；2003年3月9日から3月15日までの6泊7日の集中研修

(宿泊場所；キゴ山ふれあいの里研修館)

平成15年度；2003年11月8日・22日・29日

12月20～21日 (1泊2日 宿泊研修；キゴ山ふれあいの里研修館)

2004年1月10日

平成16年度；2004年9月20～21日 (1泊2日 宿泊研修；国立能登青年の家)

2004年12月18～19日 (1泊2日 宿泊研修；キゴ山ふれあいの里研修館)

(3) 参加者

平成14年度は、大都会で学ぶ留学生・日本人学生を対象として広く全国から募ったが、平成15年度・16年度は県内の留学生・日本人学生のみを参加者とした。各年度とも公開講座の聴講、またはボランティアとして地域住民の参加があった。

II. 各年度の概要

(1) 全体的経過

平成14～16年度の「金沢学」の経過を表3に示す。表3からも明らかなように、年度毎に実施方法が異なるのは、実施終了後の参加者の感想や評価・検討を踏まえての結果であり、「金沢学」の深化・発展に向けての探索的な試みのためである。

表3 「金沢学」実施経過(平成14年度～16年度)

年度	実施期間	参加者	実施方法	実施場所
14	2003年3月9～15日 (6泊7日)	<ul style="list-style-type: none"> ・全国大都市圏の大学(国立11・私立10)および県内; 金沢工業大学・金沢美術工芸大学・金沢大学の15の国と地域からの留学生/日本人学生の計44名 ・三重大学・横浜国立大学留学生センター教員 ・市民ボランティア 	講義および芸・道・町並み体験の3コース毎の体験学習	サテライトプラザ 大乘寺 県立歴史博物館 県立美術館 県立能楽堂 旧中村邸 加賀友禅伝統産業会館 伝統工芸箔巧館 金沢市キゴ山 ふれあいの里研修館
15	2003年11月8・22・29日 2003年12月20～21日 (1泊2日) 2004年1月10日	<ul style="list-style-type: none"> ・県内の大学のみ; 金沢星稜大学・県立農業短期大学・北陸大学・金沢大学の留学生/日本人学生の計34名 ・三重大学留学生センター教員 ・市民ボランティア 	<ul style="list-style-type: none"> ・シティカレッジ「金沢学II」の講義および体験学習 ・「金沢学II」を履修した学生は単位取得 	シティカレッジ 大乘寺 伝統工芸箔巧館 松向庵 県立能楽堂 金沢市大場 コミュニティセンター 金沢市キゴ山 ふれあいの里研修館
16	<ul style="list-style-type: none"> ・夏コース 2004年9月20～21日 (1泊2日) ・冬コース 2004年12月18～19日 (1泊2日) 	<ul style="list-style-type: none"> ・県内の大学のみ; 金沢星稜大学・県立農業短期大学・北陸大学・北陸先端科学技術大学院大学・金沢大学の留学生/日本人学生 夏コース 計28名 冬コース 計33名 ・市民ボランティア 	<ul style="list-style-type: none"> ・夏/冬2回に分けて実施 ・講義と体験学習 	サテライトプラザ 国立能登青年の家 県水産総合センター 能登島事業所 能登島水族館 県立歴史博物館 金沢市キゴ山 ふれあいの里研修館

(2) 平成14年度の概要

参加者は、広く全国大都市圏の大学（国立大11校・私立大10校）で学ぶ留学生43名と1名の日本人学生であり、日本を含む15の国と地域からの学生たちであった。年齢は20～36歳（平均年齢25.2歳）であり、専攻も文系・理系・芸術系と多様で特定の分野への集中は見られなかった。なお、所属大学は亜細亜大学、桜美林大学、大阪大学、お茶の水女子大学、京都大学、神戸大学、国学院大学、埼玉大学、多摩美術大学、千葉大学、電気通信大学、東京大学、東京学芸大学、同志社大学、獨協大学、名古屋大学、広島修道大学、法政大学、横浜国立大学、立命館大学、早稲田大学（50音順）である。

本学をはじめ、金沢工業大学・金沢美術工芸大学の日本人学生も積極的に参加し、文化体験学習はもちろん、宿泊施設においても自発的に研修会を企画する等、留学生との交流を深めた。サークル単位で留学生と共に文化体験学習を行ったところもあり、学生間の交流が活発になされた（3月11日午後、「道」^{どう}コース、金沢大学茶道部）。

また、「金沢学」の講義および3月14日午後の「能楽鑑賞」は一般公開され、毎回およそ30名、計150名の市民の参加があった。「金沢学」に対する地域住民の関心は高く、「金沢学」講座の開設前から、多くの問い合わせが大学に寄せられた。また、自発的に留学生や講座のボランティアをしたいという申し出もあり、文化体験学習コースでは市民ボランティアが活躍した。

他大学の留学生センターより、花見槇子（三重大学）、藤井桂子（横浜国立大学）の両氏が参加され、「金沢学」の運営に協力を頂いた。その他、他大学の教職員の見学者もあった。なお、平成15年度も地域貢献事業として継続することが決定している。

(3) 平成15年度の概要

平成15年度の「金沢学」は14年度実施の事業を踏襲し、実施された。前年度と大きく異なる点はシティ・カレッジの開講科目である「金沢学II」と連動させたために、一部の学生には「単位」の取得が可能となった点である。したがって、受講対象者を県内在住の留学生・日本人学生に限定した。15年度に新たに加えた科目は、「食文化ー加賀料理」であり、市民ボランティアの積極的な支援を頂き、参加者全員の満足度が極めて高いものとなった。なお、「いしかわシティ・カレッジ」の開講科目「金沢学II」（講義のみ）の内容・金沢学プログラムを表4に記す。参加した学生の所属大学は、金沢星稜大学・県立農業短期大学・北陸大学・北陸学院短期大学・金沢大学であり、日本を含む7カ国の計34名が参加した。

表4 平成15年度 「金沢学プログラム」 および「金沢学II」

<p style="text-align: center;">金沢学プログラム</p> <p>座禅 大乘寺で、座禅を体験します。</p> <p>金箔 箔巧館で金箔工芸の見学と金箔を使い、作品作りを体験します。</p> <p>お茶 松向庵のお茶室で茶道の体験をします。</p> <p>金沢の食文化 金沢市キゴ山ふれあいの里研修館において加賀料理の調理方法等の指導を受け、加賀料理を作り、食事をして研修合宿を行います。</p> <p>能楽鑑賞 石川県立能楽堂で能楽を鑑賞します。</p> <p>和太鼓 金沢市大場コミュニティセンターで和太鼓を体験します。</p>		金沢学II (いしかわシティ・カレッジ)
	回	題 目
	1	オリエンテーション
	2	城下町金沢の成立
	3	金沢の庭園
	4	金沢の文化財
	5	和太鼓
	6	加賀の工芸Ⅰ 大樋焼
	7	文学のまち・金沢
	8	城下町金沢のしくみ
	9	加賀の工芸Ⅱ 金箔工芸・水引細工
	10	金沢の茶と茶の建築
	11	能楽鑑賞のために
	12	金沢ことば
	13	都市経済学から見た金沢
	14	総合討論
15	期末試験	
キーワード：金沢，文化，歴史，継承と発展		

表5 平成16年度 金沢学プログラム

		9/20 (月・祝)	9/21(火)
夏コース (1泊2日)	午前	開講式，オリエンテーション	石川県水産総合センター能登島事業所見学 講義3「種苗生産の現状 －能登・加賀の漁業－」
	午後	「お熊甲祭」見学 講義1「能登地域と東アジア地域の交流」 講義2「能登の自然と農業」	のとじま水族館見学 閉講式
		12/18(土)	12/19(日)
冬コース (1泊2日)	午前	開講式，オリエンテーション 歴史博物館見学 講義1「加賀百万石の歴史・伝統文化」	講義3「和太鼓」 和太鼓の体験実習
	午後	講義2「金沢の食文化」 加賀料理の実習	講演「北大路魯山人について」(一般公開) 閉講式

(4) 平成16年度の概要

平成14・15年度とは異なり、「夏コース」「冬コース」の2回に分け、学習科目の新設と学習の場の拡大や季節に応じた体験ができるように配慮した(表5参照)。3年目となる16年度は、自然に恵まれ、大陸との交流が盛んであった能登地域に学習の場を広げ、「金沢学」を多角的に捉える試みを「夏コース」で行った。祭りの盛んな能登地域にあって、国の重要無形文化財に指定されている「お熊甲祭」の見学からスタートし、能登半島と東アジアの交流・農業や漁業について、講義と体験により学んだ。

また、「冬コース」は、昨年度に引き続き「食文化－加賀野菜編」を市民ボランティアの支援で行い、さらに和太鼓の実習などにも地域の方々の多大な協力を頂くことができた。参加学生は、金沢星稜大学・県立農業短期大学・北陸大学・北陸先端科学技術大学院大学・金沢大学に所属する学生で、「夏・冬コース」の両方に参加することを想定してカリキュラムを作成したが、結果的には、一方のコースだけ参加した学生の方が多かった。なお、夏コースには6カ国28名が参加、また冬コースも6カ国33名が参加した。

Ⅲ. 「金沢学」の充実と発展を目指して－今後の課題

(1) 「金沢学」3年間の検討

平成14～16年度まで実施した「金沢学」について、開始当初に計画した目的がどのように達成されたか、あるいは達成されつつあるか、に沿って検討を進める。

各年度の金沢学の終了時には、参加者全員にアンケート(資料参照)および面接・座談会等を実施し、その結果を次年度の科目の新設・採用および実施方法に生かすなどの改善を重ねてきた。従って、各年度の検討は、3年とも共通する部分と各々の年度にのみ特徴的なものがある。それらを統合して、以下の3点について明らかにする。

① 特色ある文化体験学習用のプログラムの適切性

各年度終了時に実施するアンケートの回答に見る限り、「興味のある文化体験学習」がいずれの年度も最も多い参加理由(およそ半数～65%以上)となっていることから、学習動機を喚起させ、学習者のニーズを捉えた文化体験プログラムが作成されたといえよう。なお、全国の大都会で暮らす留学生を対象とした平成14年度では、「金沢に行ってみたかった」(41.9%)が次に多く選択されており、「金沢」について事前に何らかの知識・情報を得ているものと思われる。

また、実際の体験学習後の評価も、「とても満足」「満足したほう」が極めて高い

割合(90%)である一方、少数ではあるが「講義を聞く」というのが不満の理由としてあげられている。特に日本語力が十分ではない留学生にとって、難しい漢字や専門用語、また日本人であれば当然学習済みの基礎知識を要する講義は、理解し難いものであったと思われる。しかし、理解を深めるためには体験だけの学習では不十分であり、講義との組み合わせや事前学習の工夫を考えることが必要となる。

今後金沢学で取り組みたい科目としては、予測されたことではあるが、「文化体験」という回答が多かった。その内容は、お花見、茶道、生け花、寿司の作り方、着付け、踊り、加賀友禅、金箔、九谷焼、和菓子、温泉、食文化などであった。

② 文化体験学習を通じた国際教育交流

日本人学生と留学生の相互理解をはじめ、講義・体験を共にした地域住民の方々との接触など、多文化状況の中で活発な交流が見られた。最初の意図通り、「金沢学」を媒介として学習者全員が意見交換し、議論し、お互いを理解するために必要な出会いの場が提供されたことになる。とりわけ留学生の自由記述欄の多くには、興味ある体験学習とならんで学習者同士の交流に高い満足度を示している様子が述べられている。

代表的な記述を数例、以下に上げる。

「日本人の学生と交流をもつ良い機会になった。／一緒に参加した日本人の学生も、自分の国の歴史や文化が更に理解できるし、また一緒に勉強した時に様々な国からの人は、他の国の人と交流するチャンスがあるから友達ができるし、異文化が理解できるから金沢学のような活動は本当にいいと思う。」(留学生)

「参加できて本当に良かった。金沢の歴史と文化に触れることができただけでなく、多くの友人を作ることができた。／留学生の方々や地域の方々、そしてそれを支えてくださった多くの方々に出会い、衣食住を共にする企画は、短期間でしたが私自身の中では大きな変化をもたらしたと同時に、人と触れあい交流する楽しさや、そこから学ぶことは計り知れないと感じた。」(日本人学生)

③ 地域との連携と文化活動を通じた貢献

ここ2・3年、特に地域の大学間の連携や自治体との連携が重視されている。学生同士の交流をはじめ、地域と大学とが多次元で協力・交流することに対して、本事業は文化活動を通じて、その機会を提供したことになる。また、金沢学に参加した学生たちを經由して、地域の持つ文化的特徴は国内外に発信されたことになり、この地域の文化が流布されることへの貢献と捉えることができる。

(2) 今後の課題－金沢学の充実と発展のために

3年間の実績をもとに、「地域社会・経済の活性化への貢献－地域社会文化再生支援のための教育プロジェクト事業－」（平成17年4月～平成22年3月）において金沢学を実施するため、さらなる充実と発展が求められる。従って、現段階では以下の4つのプロジェクトの立ち上げを計画している。

① 「金沢学」の体系化を図り、大学内の共通科目（正規科目）として新設する

受講者の目的、受講者（対象者として想定されるのは留学生、日本人学生、教員志望の学生、留学生のチューター、地域住民）のニーズに応じた教育内容にするため調査研究を行うことから開始するが、最終的には入門コース、中級コース、上級コースのような形での体系化が考えられる。

② 「金沢学」教育研究会を設置する

学内、学外のネットワークを構築し、「金沢学」の教育内容の検討、教材開発のため調査研究を行う。

③ 「金沢学」の実施、改善を行う

入門コース、中級コース、上級コースの実施と各々のコースのプログラムの新設・改善について点検・評価を行い、検討を進める。また、実施方法の適切性についても、絶えず検討する。

④ 教材開発

「金沢学」キット・Web教材を開発する。「金沢学」キットは各専門家による、金沢をアカデミックに紹介するための素材となるものである。Web教材は外国語による概要説明を作成し、渡日前の学習や、文化体験前の学習、工房における説明用として利用する。

今後5年間は、金沢学の体系化を目的とした系統的な作業を意識的に積み重ねていくことが求められる。より適切な文化体験的教育の在り方を探索的・多角的に進めて行く予定である。

文 献

- ・金沢大学留学生センター 「金沢学への招待」平成14年度金沢大学地域貢献推進事業報告書2003
- ・金沢大学留学生センター 「金沢学への招待」平成16年度金沢大学社会貢献推進事業報告書2005

(資料；平成16年度の例)

「金沢学」アンケート

2004.12.18～19

1. 「金沢学」に参加をした一番の理由は何ですか。(一つに○)
①興味のある文化体験学習プログラム ②大学のスタッフにすすめられた
③参加者どうしの交流 ④その他(具体的に；)
2. 「金沢学」冬コースの内容全体についてはどうでしたか。(一つに○)
また、その理由も書いてください。
①とても満足 ②満足した方 ③不満な方 ④とても不満
(理由；)
3. 最も興味をもった科目は何ですか？ また、その理由も書いてください。
①歴史博物館 ②加賀料理 ③和太鼓 ④北大路魯山人
(理由；)
4. 来年度の金沢学で受けたい科目があったら、いくつでも書いてください。
5. 宿泊施設の満足度は(一つに○)
①とても満足 ②満足した方 ③不満な方 ④とても不満
(理由；)
⑤その他(具体的に；)
6. 「金沢学」への御意見・御要望
・開講方法：①今回のように夏・冬2回に分けて実施
②1週間くらいで集中的に実施
③その他(具体的に；)
・費用：①今回のように2,000円くらい ②2,000円～5,000円
③5,000円以上 ④その他(具体的に；)
・開講時期：①8・9月や12月のような授業がない時期
②授業がある時期の土曜日・日曜日や祝日
③その他(具体的に；)
・その他、希望があれば何でも書いてください。
7. あなたの性別／年齢 ・男性 ・女性 / ・10代 ・20代 ・30代
8. あなたの出身国・地域 ・中国 ・韓国 ・中国／韓国以外
9. 「金沢学」や「学生どうしの交流」についての意見がありましたら自由にお書きください。今後の参考にしたいと考えています。(スペースが足りない場合は、裏面にもお書きください。)

御協力、ありがとうございました。

(Practice report)

Plan and practice of Kanazawa studies

M. Matsushita, T. Okazawa and T. Noda

"Kanazawa studies" would identify the cultural value of the Ishikawa area through accumulation of both tangible and intangible cultural heritage and resources scattered in the area. Providing opportunity for students to learn from these resources would bring awareness of cultural development of Kanazawa, as well as historical and generational changes that have occurred throughout the time. This would lead to succession and better development of the culture directed by people of younger generations. Introduction of "Kanazawa studies" is based on the following three purposes.

1. "Kanazawa studies" as one component of international student education
2. International exchange providing cultural experience study
3. Contributing to society by means of learning through community

"Kanazawa studies" was carried out from year 2002 to 2004, with different theme in each year. Approximately 30 to 50 university international and Japanese students, joined by citizens and volunteers enrolled. The evaluation by participants was very positive.